

全てのJFに潜在する

不正発生のリスク

JFの経営者および管理者の皆さまは、ご自分の組織の職員を信頼しつつも、心の片隅で、彼らが犯す不正の可能性について心配し、日々の業務を遂行されていると推察します。不正は、犯した職員の現在の生活と未来を破壊し、さらに組合の信用を失墜させ、また組合財産の減少を招きます。冷静に考えれば何一つ良いことはありません。しかし人間は、いともたやすく不正に手を染めてしまうことも、悲しい現実です。JF職員といえども例外ではありません。全てのJFに不正発生のリスクがあります。

不正の発生については、米国の犯罪学者であるドナルド・クレッシーが主張した「不正のトライアングル」と呼ばれる仮説が広く一般に認められています。こ

の仮説では不正は、①機会・不正を可能ないし容易にする環境、②動機・不正に頼らざるをえない事情、③正当化・不正の実行を積極的に是認しようとする犯人の主観的事情の三つの要因がパチスロのように全てそろったときに発生しやすくなると考えます。

この三つの要因を少し具体的に説明すると次のようになります。

①の「機会」は不正をたやすく実行でき、かつ発見されにくい職場環境です。②の「動機」は借金の返済に困っているとか、組織や上司への不満といった主として個人的な事情です。また③の「正当化」とは、横領ではなく一時的な借り入れであるとか、自分に対する低い報酬の不足分であるとかの犯人の勝手な言い訳



JF 全国監査機構
監査委員長
おのみまさゆき
近江正幸

です。このトライアングル仮説に基づけば、経営管理者が不正を防ぐ、あるいは発見するためのキー（鍵）はどこにあるでしょうか。

キーは、トライアングルを崩すことです。トライアングルを崩せば職員による犯罪を未然に防ぐ可能性が高まります。では、JFの経営管理者の方々は、このために具体的に何をしなければならぬのでしょうか。

機会・動機・正当化について現在の職場および職員の状況を注意深く検証すれば、不正を発見する糸口が見つかる可能性が高くなります。また前号まで数回にわたり掲載した自主点検・内部監査が効果を発揮します。この点については次号で説明することにします。